

## 志賀直哉〈山科もの〉ノート

——「痴情」を中心に——

林 廣 親

## 一 〈山科もの〉論の定石について

大正十四年から十五年にかけて発表されたいわゆる〈山科もの〉<sup>(1)</sup>は、「心境小説の「典型」とも評されるように小説史の上からも興味深い連作なのだが、個々の作品に目が向くことは稀だった。<sup>(2)</sup>それは、例えば「むろん、それらは広義の私小説として読まれねばならぬ」<sup>(3)</sup>「一作だけを切り離して読んだのでは、事件の姿をつかむことはできない。志賀と志賀の家庭への知識を踏まえて、四作をまとめて読むことによって、ある理解に到達しうる作品群なのである」<sup>(4)</sup>といった作品観がアプローチの〈定石〉として踏襲されてきたために<sup>(5)</sup>、ほとんど見当たらないのはそれゆえのことだろう。小説としての出来具合はそれぞれどうか。また書かれ方の特徴がどこにあり、それと連作全体の関係はどうなのか。こうした種類の関心は〈定石〉に従っている限り問題になりにくい。しかしながらそれを離れてこの連作を読めば、書かれ方の不統一性が何よりもまず気になるはずだ。

例えば「晩秋」は「彼には郁子の心が動揺してゐる事はよく解つた。」と書き出される。それまでの三作では「妻」としか呼ばれなかったこの女性の名前がそこでようやく明らかになるのである。<sup>(6)</sup>あるいはそこで名付けが起こると言うべきか。それは方法意識に関わる問題と見るべきものだが、要するになぜそういうやり方をしたかである。問題は見た目よりずっと大きそうだ。こうした疑問に対しても習慣的な〈私小説読み〉を離れたところからの〈山科もの〉へのアプローチがあつてしかるべきではないか。〈定石〉といえは、「続創作余談」の自作解説への言及もまたそこに<sup>(7)</sup>違いない。

「山科の記憶」「痴情」「晩秋」「瑣事」此一連の材料は私には稀有<sup>けう</sup>のものであるが、これをまともに扱ふ興味はなく、此事が如何に家庭に反映したかといふ方に本気なものがあり、その方に心を惹かれて書いた。「山科の記憶」と「痴情」には今も或愛着を持つてゐる。

このくだりを引用しても最後の一文は顧みられないのが通例なのだが、なぜ後年の志賀は「山科の記憶」と「痴情」への愛着のみを

語って、他の二作は挙げなかったのか。

「山科の記憶」と「痴情」の時間は二日にわたって連続しており、おのずから一体性が強い。一方「瑣事」と「晩秋」について見ると、時間的にはやや離れた出来事が描かれているが、「瑣事」の発表を余儀なくされた事情が「晩秋」で語られるといういわば相互浸透の關係にあり、その方法はまさに私小説特有のものと言える。

また「晩秋」にはいわばすでにピークを過ぎて遠ざかり行く危機の後姿を見送るような気分がある。要するに「瑣事」と「晩秋」があつてはじめて〈山科もの〉は「広義の私小説」あるいは「心境小説の「典型」にふさわしいものとなるのに違いない。そこで、憶断のそしりを承知で言うなら、その二作が「愛着」の対象から外れたのは後年の志賀がそうした評価を必ずしも歓迎していなかったからではないのか。ちなみに、彼が自ら編む最後の作品集とした『枇杷の花』（昭和四十四年）には「山科の記憶」と「痴情」のみ採られている。いわゆる私小説・心境小説に対する志賀直哉のスタンスについては改めて検討されるべき余地がありそうだ。

作品個々の完成度を見た場合、私見では四作のうち短編小説としての緊張度と結晶性が最も高いのは「痴情」である。小説としての自立性を備えた作品と言い換えてもよい。「山科の記憶」は「痴情」のプロローグであり、「稀有」な「材料」に関わるそもそのモチーフはこの二作で十分満たされているのではないかと思われる。以下はそうした仮説に基づいたアプローチである。

## 二 登場人物の呼称に関わる問題から

まず「山科の記憶」の特徴について考えることから始めたい。冒頭部分に語り手による次のような説明がある。

彼は妻を愛した。他の女を愛し始めても、妻に対する愛情は変らなかつた。然し妻以外の女を愛するといふ事は彼では甚だ稀有な事であつた。そしてこの稀有だという事が強い魅力となつて、彼を惹きつけた。

先に触れたように、この「妻」は後の「晩秋」ではじめて固有名詞で呼ばれることになるのだが、「瑣事」「山科の記憶」「痴情」では単に「妻」としか呼ばれていない。主人公は四作を通じて「彼」と呼ばれている。では「女」の方はどうか。

「瑣事」の中では何度も「お清」という名前が出され、その素性もおおよそ見当が付くよう書かれている。それが「山科の記憶」と「痴情」では名無しで、「女」としか書かれない。「痴情」に至って「祇園の茶屋の仲居」という素性だけは分かるが、「山科の記憶」の段階ではその素性さえ分らない、ただの「妻以外の女」である。したがってこの正体不明性は「山科の記憶」だけに見られる特徴と言えよう。

物語の時間にそつて作品を並べると「山科の記憶」―「痴情」―「瑣事」―「晩秋」である。そしてその順に読み進んだ場合、「女」についての情報は「山科の記憶」ではほぼ無いに等しく、次の「痴情」では「祇園の茶屋の仲居」、「二十か二十一の大柄な女で、精神

的な何ものをも持たぬ、男のやうな女だった」と説明される。さらに次の「瑣事」で彼女が「お清」と呼ばれる「女」であることが分かる。「晩秋」の情報は「瑣事」と変わらない。その順で読むと人物情報が少しずつ増えるというのも面白いが、「山科の記憶」・「痴情」では共に「女」で終始しているのに対して、「瑣事」・「晩秋」では「お清」と呼ばれており、そこにそれぞれの共通項が認められる。

細かい事にこだわるのは、発表の前後関係を考えてある疑問が浮かぶからだ。それは「名前」を含めて「女」の情報は最初の「瑣事」ですでに明らかにされているのに、なぜ次に書かれた「山科の記憶」では再び素性不明で名も明らかでない「女」に戻ったかである。

私小説として連作する心積もりなら、「瑣事」の次に書く「山科の記憶」の冒頭部分でも「彼は妻を愛した。お清を愛し始めても、妻に対する愛情は変らなかつた。」とした方が分かりやすく、また自然な書き方だろう。なぜそうしなかつたか。

おそらくそれは「瑣事」が偶々発表を余儀なくされた「走り書き」だったことと無関係ではあるまい。「晩秋」にその事情が詳しく書かれているが、それにしろ「瑣事」は小説としての緊張度が低すぎる。その印象の由来は材料を処理の仕方でありそうだ。愛人の「お清」と約束した日を待ち切れずに一人相撲を強いらる男の一日を描いた内容は、愚かしさの告白に通じる点でいわゆる私小説そのものと言ってよい。作者の体験が書かれているという興味以外は小

説としての価値に乏しい作品である。それでいて語り手と主人公の距離感<sup>(8)</sup>は「山科の記憶」以後の作にはない種類のものだ。「彼」の笑いや上機嫌には何か空疎な感じがあるが、それは志賀自身がそうした情痴の体験そのものを告白的に書くことの意味を疑っていたからではないかと考えられる。

「続創作余談」には〈山科もの〉の全体に付いて、その材料を「まともに扱ふ興味はなく、此事が如何に家庭に反映したかといふ方に本気なものがあり、その方に心を惹かれて書いた」とあるが、「瑣事」は単独の作としてはそういう書き方になっていない。むしろ「まともに扱」っている。ただし、私小説にふさわしいまじめ腐った顔つきでは扱えなかつた。そこに一般的な私小説作家と自らを区別しようとする志賀のスタンスを見ることが出来るのではないか。そのような「瑣事」の後に発表された「山科の記憶」は、「女」の名前も素性も明かさずに、「彼」と「妻」の間に生じた感情の対立を描いた小説となつた。この作に〈仕切り直し〉の意図を、すなわち「此事が如何に家庭に反映したか」というモチーフの始点を想定することも可能である。

### 三 「山科の記憶」について

「山科の記憶」では、互いに容れたい要求を持った夫婦の関係が描きだされる。「妻」は「夫」が自分以外の女を愛することを許さない。プロットの上で見落とせないのは、浮気が発覚して採め事が起るといふ単純な話ではかならずしもないことだ。

「どうも変だと思つて、電話をかけて見たら矢張りさうだつた」「そんな事は決してないから……うまい事をいつて、人をだまして……」となじる「妻」のことばから、ことの発端はかなり以前のことで、すでに夫婦の間にひと悶着があつたが、「彼」が「女」にもう逢わないと誓つて事が収まつたらしいと推測しうる。「妻」はその約束を破つた「不実」が許せず、憤りからヒステリックに「彼」を攻め立て、「女」と別れると断言させずにはおかない。

ところで、「晩秋」には「彼」の「女」の「お清」が次のように言う場面がある。

「兎に角おうちの奥さんは人並みはづれて恪気深うおすな。何どすいな。月に三遍か四遍おいでやす位。おうちのご商売にさはるといふでなし。あんたはんも余程やな……」

この「女」の「妻」に対する見方がある意味では、当時世間並みのものであつたらう。所詮は商売すくの関係と知りながら独占欲がすぎるというのである。「余程」とは、よほど女房に甘いという意味で「彼」も認めざるを得ない。江戸時代なら「妬」は七去の一つである。この「女」のような感覚は小説の当時にも一般に在つたはずだ。「山科の記憶で」この「女」の素性が語られないのは、最初からそれがつきりしていたら、問題が読者に共有されにくいと思われたからではないか。下手をするとやきもち焼きの女房に辟易する話として読まれかねない。まして私小説として志賀自身の家庭と重ねてしまえば、彼の人生の珍事という了解だけで終つてしまふ。

たしかに「妻」の嫉妬は物語の大きな要素に違いないのだが、

「山科の記憶」ではそれが夫婦間の信頼や誠実さへの要求と絡んでゐる。それと対置されるのが「彼」の思いと行動である。「痴情」のプロローグとしての意味も、モチーフの根本にあるそうした原理を告げることにあると考えられる。

「知らずにゐれば関係のない事だ。さういふ者があつたからつて、お前に対する気持ちは少しも変わりはない」彼は自分のいふ事が勝手である事は分つてゐた。然し既にその女を愛してゐる自身としては妻に対する愛情に変化のない事を喜ぶより仕方がなかつた。

「そんなわけはない。そんなわけは決してありません。今まで一つだつたものが二つに分かれるんですもの。そつちへ行く気だけが、減るわけです。」

「気持ちの上の事は数学とは別だ」

「いいえ、そんな筈、ないと思ふ」

妻はヒステリックになり、彼の手の甲をピシリ／＼打つた。彼は妻に対し毛程も不実な気持ちは持つてゐないといふ事を繰返した。

「不実な気持ちがなくて、さういふ事が起る筈がないじゃありませんか」

然し彼は嘘をいつてゐるのではなかつた。そして彼は何かいへば詭弁を弄するやうになるのが自分でも不愉快になつた。

「さういふ感情まで一生飼殺しになつてゐるわけにはいかない。只お前をその事で不幸にしなければいいのだ」

「妻」にしてみれば配偶者以外の異性を愛することは、信頼に対する裏切りであり、誠実に欠けた行為以外の何ものでもない。

「彼」の「知らずにあれば関係のない事だ」という言葉は、「女」と違ふことが「妻」の地位を脅かしはしないという思いに由来している。「痴情」では「女」の素性を明かす事でその点に踏み込んだ記述があるが、ここでは目立たない。「彼」は実感から「妻」の言葉に承服できないのだが、裏切りの後ろめたさもあつて「弱者」の位置に立つ事を余儀なくされている。

こうした対話からは「彼」自身が感じているように男の「身勝手」が思われて、どうしても「妻」の方に同情しその気持ちに共鳴したくなる。しかし考えて見れば、事は「配偶者のある人間は生涯他の者を愛してはいけないのか」という本質的な問題に関わっている。「彼」の言葉を裏返せばそういうことになる。しかしそれは「妻」にとつてはそもそも許されない発問だろう。

「山科の記憶」の「二」は、妻の過去にあつた擬似恋愛をめぐる話題に終始している。きっかけは「去年病院にゐた時にも、若し先生が好きになつたら大変だ、さう考える方なのよ。本当に貴方だけ想つて満足してゐるのに……」という「妻」の言葉である。

物語としてはかなり唐突な話題転換だが、プロットの文脈としては理に適つたものに違いない。「妻」の訴えは彼女のいじらしさ、人の良さ、夫に対する忠実さを思わせるに十分だが、そんな彼女と話しながら「彼」は「自分の気持ち」が、その事に案外余裕を持つてゐた事を今更に気づいた。それは妻の気持ちの純粹さが彼に反映し

ていたからだと思つてゐる。「彼」には女に対する自分の気持ちが本気だという所に弁解があつた。が、妻には本気なら本気程いけなかつた。」と言うのは決定的なずれで、「彼」はあくまで自分の感情から発想し、「妻」は倫理的発想を離れることがない。

結びの「三」は、「話が妻の事に外れた事は幸いだつた。妻は落ち着いた。然しそれが彼の事に対する少しでも寛大な心持をひき出す手よりにはならなかつた。妻はどうしても女と別れることを彼に断言さす迄は執拗に我を張つた。妻の強いのは此事だけだ。彼は一時的にもそれを承知するより仕方がなかつた。」と短い「我」という言葉が「妻」に「関して使われているのが眼を引く。

#### 四 「痴情」の起点と終点

「痴情」は「薄曇りのした寒い日だつた。彼は「寒さから軽い頭痛を感じながら、甚く沈んだ気分びんで書齋に閉じこもつて居た。」と書き出されるが、その「甚く沈んだ気分」が物語の流れの起点であり、それが行き着くところには「彼は二十分ほどで支度し、漸く最後の急行に間に合つた」という行動がある。

その前に「妻」から来た長い手紙がそのまま引用されているので、「彼」の行動は帰宅を急ぐあまりのことと読むのが定説である。しかしながら、「妻」の元へ帰ることを急ぐのではなく、京都へ還ることを急ぐのだと読めば行動の意味は全く違つてくる。「彼」の飛び立つような思いは「女」に一刻も早く会いたいからだ。そのようにしか読めないようにこの小説は書かれているのではないか。

また物語の起点には、「女」に対する「恋愛と思ふより仕方がなかった」という「彼」の実感がある。終点には「私が道楽したんで」と言う言葉がある。「恋愛」から「道楽」へというのは注目すべき認識の変化である。それは作品の根本をなすモチーフと直接関わるものに相違ない。

\*

「一」では天候を描写しながらの導入部に続いて「それはさうと、此事をどう処置すべきか彼には却々決められなかつた。」と、「此事」すなわち「彼」の抱えている問題を提示するくだりが続く。「此事」「それ」「此心持」「その氣」「さう決心」「其事」、ふたたび「此事」と指示語と指示代名詞の使用が目立つ文体は、行きつ戻りつして反芻しないとよく分からない。

こういう書き方をなぜしたのか。「山科の記憶」を読んでいない読者にも「彼」が当面している問題が直に伝わる工夫と見たほうがよさそうだ。実際前後しながら読んでみるとおよその事は推定できる。ちなみにこうした文体は、例えば「城の崎にて」で鼠の苦闘を見た散歩後の主人公の混乱した気分を叙述したくだりと同じで、その点からも「痴情」もまた方法意識に富んだ小説であることが分かる。読者はこのくだりから次のような「彼」の思いを読み取るこ<sup>(10)</sup>とができるだろう。

「女を念ひ断る」「できればそれに越した事はない」「が、それはいやだ」「自分の執着」「その心持を殺し」「無理往生」する気にはなれない。「決心した所が」「実行」できない。「此のまま再び妻を

欺き続けるのも不快」、しかし「妻」に「寛大」さを望むことは不可能。「今日中に総てを片づけて呉れ」と「妻」に言われて「形式的にも一時別れるより仕方ないと決心し」ながら「彼」の心は堂々巡りの立ち往生を続けるしかない。

また「一」では「山科の記憶」において「愛する女」とだけ書かれていた「女」の素性が祇園の茶屋の二十歳ほどの仲居であることも分かる。重要なのは「彼はかういふ女に何故これ程惹かれるか、自分でも不思議だった」とあり、すぐ続けて「これ程心を惹かれるというのは全く思ひがけなかつた。」と繰返して念押しされていることである。つまり「彼」は自身でも説明のつかない執着の虜になつてしまつたのだ。

商売で男と付き合うに過ぎない「女」の素性からすれば、「恋愛」という言葉は二人の関係にそぐわない気がするが、「彼」にとつて否定できない実感である、説明のつかないような執着を説明する言葉は「恋愛」以外になつたのである。相手から感じる魅力について「総て官能的な魅力だけだといふ点、下等な感じもするが、所謂放蕩を超え、絶えず惹かれる気持ちを感じてゐる以上、彼は猶且つ恋愛と思ふより仕方がなかつた」というのは、そうした事情に関わる説明的な記述である。次の「そして彼はその内に美しさを感じ、醜い事をも醜いとは感じなかつた。（傍線筆者）」という記述は、「彼」と語り手の距離を示すものと見てよい。

語り手との距離を意識して読むと、「彼」が抱えている問題を二つのレベルで受取ることが可能になる。つまり彼自身が感じている

それと、距離を持つて見たそれである。彼の意識に即してみれば、逢わないではいられない女と別れることを強いられることが当面している問題で、金で片がつく関係だと思ひながら「寛大」になれぬ「妻」がうらめしいということになる。

しかし語り手の視点から見ると、事は「彼」の囚われた心のゆくえをめぐる問題に昇華される。そして「恋愛」を「道楽」だったと言えた時、すなわち「痴情」の終点に至つて「彼」の心は確かに感涙から解放されていたに違ひない。

## 五 〈脅迫〉し〈使役〉しようとする「妻」

「痴情」の「二」は、「妻」が書齋に来て始まる押し問答を描いている。ほとんど対話に終始する書き方から読者がまず感じるのは、「彼」の身勝手さと哀れな「妻」のいじらしさだろう。その身勝手さを志賀直哉の強烈なエゴと結びつけたくなるが、それで理解できる作品なら改めて論じる必要もない。「彼」の自己中心性は見易すぎるし、被害者としての「妻」の印象は哀れに過ぎる。それは「痴情」を通じての特徴だ。

「銀行おそくならないこと？」という第一声は、なかなか出かけない「彼」に痺れを切らした「妻」の登場を告げている。「おそくなつたら、あしたでもいいぢやないか」と逃げようとする夫の言葉をきつかけに、次のやりとりが続く。

「それはいや。どうしても今日片をつけて下さらねば……。」

「日延びればそれだけ私の苦しみが延びるんですもの。……そ

れより一日でも貴方を自分のものだなんて思はして置くの、いやな事だ。一時過ぎたのよ。私も支度しますから、直ぐお支度して頂戴」

「お前はよす方がいい」

「いいえ、私、逆も自家で凝つとしてゐられない」

「熱があるぢやないか」

「病気になるつてもいいの。病気になるつて死んだら、貴方も本望でせう？」

傍線部には「妻」の自己中心的な考え方と独占欲がはつきり出ている。被害者意識が言わせたものと受取れば無理も無いことばだが、しよせん遊び相手に過ぎない「女」であることを思うと大げさ過ぎる考え方ではないか。続くことばにも夫から目を離せない不信感と一種の脅迫的発想が見えている。

その後のやりとりでも「貴方は本統に勝手な方ねえ」と嘆息しながら「妻」は一步も譲らない。さらに彼女の性格を決定的に特徴付ける言い方もある。

「だから、もういい事よ。何も彼も昨晚本統の事を云つて下さつたんでせう？もう何も隠していらつしやる事ないんでせう？

それでいい事よ。それで、どうぞこれからの事を堅くお約束して頂戴。もう決してさう云ふ事をしないと、——それを私に信じさせて下さい。今までの事私も忘れまますから、それだけ信じさせて下さい。……ええ、どうなの？」

「それは分らない。ないつもりの方が起こつたんだから、今後

とても請け合へない」

妻は急に亢奮して叫んだ。

「それぢや私、生きてゐられない」

言葉は丁寧だが容赦のない要求を繰り返して相手を従わせようとする台詞で、「お約束して頂戴」は命令形の一つだし、見過ごせないのは「信じさせて下さい」という言い方である。「させる」は文法では使役の助動詞に当たる。夫がそれに応じないと「生きていられない」と言う。「彼」の側に立つて見れば「妻」は脅迫によって人を使役しようとする存在である。

「させて」は「妻」の癖になつた言い方である。それが作中一貫しているのは最後の哀切な手紙の前半に見られる「ほんとにもう一生のうちにごうゆうつらひ思ひをどうぞさせないで戴き升」、「もうほんとにあなたを信じさせて戴き升」、「どうぞ詳しくご返事を頂いて私の安心出来る様にさして頂き升」という表現からも明らかだ。方法に意識的でなければこうした表現が多用されることはないだろう。

「三」の前半は二人が「京都東山三条」に至つて、用意した金を持ち「妻」には近くの友達のところまで待つているように言つて別れた後、激しく降りだした雪の中を「女」と会う宿へ「彼」が赴こうとする場面である。「彼」は往來を越したところの煙草屋に立ち寄る。

そして再び其処を出ようとすると、胸や髪に一ぱい雪をつけた妻が二間程離れた所に立ち、泣き出しさうな顔で何か小声で

云つてゐた。妻は一と晩の間に眼に見えて衰へて了つた。そして彼から近寄つて行くと、妻は片方の肩の上へ首を傾け、哀願するやうに、「ねえ、いいこと？ ねえ、いいこと？」と云つた。「もう、よろしい。雪の中にいつまでも立つて居ると本統に病気になる」妻は漸く還つて行つた。厚いシヨールから出て居る引詰に結つた小さな頭の遠去とほざかつて行くのを見ると如何にも見すばらしく、哀れに思へた。

長く引いたがおそらく「痴情」でもつとも印象に残る場面ではないか。考えて見れば「不信感」からの行動なのに、それさえいじらしく見えてしまふのだが、「女」との関係が続いたら死ぬという独占欲は嫉妬から来ている。先述のように「晩秋」では「お清」が「奥さん」の「愷気」に呆れる言葉をもらしているのだが、「嫉妬」とは「自分の愛する者の心が他に向くのをうらみ憎むこと」（精選版日本国語大辞典）である。「妻」の自己中心性はさまざまなやり方で示唆されている。「彼」はひたすら彼女が「其事に寛大になつて呉れる事」を願っているのだが、この「妻」は「彼」が「妻以外の女」を愛することを決して認めず、「無理往生」を強い続ける。

## 六 「恋愛」から「道楽」への意味

哀れでいじらしい被害者である「妻」の独占欲を描き出す一方で、作品は「女」に対する「彼」の執着の深さも繰返し語っていく。

女は珍しく直ぐ来た。そして彼がその事を云ひ出すと、当惑したやうに黙つてゐたが、仕舞に「かなはんわ」と云つた。芸



者達から祝物を貰つてある。それをかう早く別れねばならぬのが「かなはん」と云ふのだ。理由は明瞭はつきりしてゐた。そしてその理由で女は實際困るらしかつた。女は泣き出した。

「女」は別れ話に難色を示した。しかしそれは「彼」への愛情のゆえでない。「祝物を貰つてある」というのは、祇園界隈の話だから、花柳界の習慣だろう。いわゆる〈旦那〉ができた祝いの品である。この言葉は二人の關係がそれなりの時を経て事情を窺わせる。「彼」は特別な間柄に成れてすぐ、その關係を解消せざるを得なくなつたのである。手切れ金は渡しても「自身には女と別れる氣は全くなかつた」のも無理はない。

「彼は一人である時も、人とある時も頭から女を完全に離しきる事はなかつた。」とあるが、そのまま掛け値なしに受取つてよい。

「家庭の調子を全く破壊」するに「働する事柄」とも思わず、「女」は一つの商売に過ぎない事は分かつていて、また自分の「恋愛」も若い女の官能的魅力に対する執着である事を承知し、手切れの金を渡した事を欺瞞だと思つていながら別れられない。まさに「痴情」で病膏育の「彼」である。

「女」に手切れの金を渡しても、「彼」の中では何が変わったわけでもない。しかし「妻」に約束した手前困つたことになつた。「京都に居て、此処へ来ない自信を彼は持てなかつた。」からである。

「彼」は事実として自身の中にある「女」への執着にこだわらざるを得ない。問題はエゴイズムと言うより彼流の誠実さに関わつてゐる。「無理往生」すれば「妻」も「女」も「自分」をも欺くこと

になると感じている。「これが何かの意味で平穩に歸して呉れるまでは彼は女と別れる氣にはならなかつた」のはアイデンティティへのこだわりと言つてよいが、「女」との「恋愛」がはじめからそういう意味を帯びていたとは思われない。「女」との關係に幻想は持つていなかつたからである。

「女」に金を渡した日から「妻」は病氣になり、衰弱も激しい。「いつもめり込むやうに見えて居た蒲鉾型の指輪が手を下げると自然に指から抜け落ちたりした。」という文で物語は一旦閉じられる。まことに哀れまれてしかるべき「妻」だが、その衰弱は「彼」を脅迫し使役しようとして止まない存在の主張である。だから「兎に角、彼は早く何処かへ行き度かつた」わけだろう。

\*

その後のプロット展開は速い。ついでがあつて上京した「彼」は「妻」からの手紙を受取り、続いて来た電報を読んで直ぐ京都市の汽車に乗る。

中村光夫はこの手紙について次のように述べている。<sup>1)</sup>

「痴情」に引用されている手紙は、こういう状態のなかで妻が夫にあてた手紙のなかで、おそらく比類のない美しさを持つだけでなく、「妻を欺く代りに仮に自分を欺いてゐる」ような氣持ちで女とわかれたばかりの夫の心を自分に引きもどす目的に、どんな巧緻な計算より正確になつています。

あえて古い評論を引くのは、このような見方はその後無条件に継

承されてきたものだからである。阿川弘之は手紙を一部引用した上で次のように書いている。<sup>12)</sup>

さすがの中村光夫が、此のような状態の中で妻が夫に宛てた手紙のうち「おそらく比類のない美しさを持つ」ものと感嘆した綿々たる長い手紙である。前後もつと色々書いてあり「痴情」はこの書簡全文の引用を以って終っている。

誰でもこの手紙には参ってしまおうようで、阿川はそれに続いて「オカヘリナガフ」と電報が届き、次いで「彼は二十分程で支度し、漸く最後の急行に間に合った。」というプロットがあるのを無視して済ませている。阿川をはじめ志賀夫人を知る人は多いが、皆彼女に好感を寄せたようだから、作中人物と区別しないとそうなるのも無理はない。

しかし、小説である以上「妻の手紙」はそのように受取られることを予定した作者の作り物に違いないだろう。そして読者は感動しても「彼」の心は動かない。

行動の契機は電報が来たことにあるのではないか。なぜなら「彼」ととって「手紙」と「電報」のメッセージは全く違うと考えられるからである。「山科の記憶」と「痴情」の大小のプロットは、すべてこの「妻の手紙」↓「電報」↓「出発」という終幕の展開に読みの焦点が来るよう極めて意識的に組織されている。そのありようはこれまで考察してきた通りである。

「手紙」では「御無事御暮しの御事と存じ升。」という書き出しから「御」の字を数えれば五〇個近く使われている。実にへりくだっ

た印象であり、哀れむべく同情すべき「妻」に相違ないが、読者がそう感じざるを得ないように書かれているのだ。また先にふれたように「手紙」の表現には「あなたを信じさせて」などという使役の助動詞が目立つ。小説の流れから言えば、これで「彼」の心が変わるわけがないのである。

\*

「妻」の手紙は前半と後半で気分も違っている。比較の便に主な話題を抜き出して次に示す。

#### 前半

・ 只今もずい分く淋しい気持ちになりましたので一人涙が出ますので御文したためました。

・ どうしても、ようきの気持ちになれません。

・ ほんとにもう一生のいちにこうゆうつらひ思ひをどうぞさせないで戴き升。

・ お猿もたうとう死にました。

・ もうほんとにあなたを信じさせて戴き升。

・ どうぞく委しく御返事を頂いて私の安心出来る様にさして戴き升。

#### 後半

・ 毎日御いそがしく、またおかきものでおつむり御つかひの事とお察し申上升。

・ 少しでもお神経痛の方おわるかつたら函根はせねにご養生に御出遊ばします様願上升。

・ 夜分は別にこわい事も御座いませぬ。子供たち元気に致して居り升から御安願上升。しじゅう泣いて斗もおりませぬ。  
 ・ これだけ下らぬ事を申し上げましたら胸の苦しいのが楽になりまして。

前半は体調の悪さをおわせ、淋しさ、つらさ、悲しさ、胸の苦しみを訴える文が目立ち、「お猿もたうたう死にました。」という《脅迫》も混じっている。「どうぞく詳しくお返事を頂いて私の安心出来る様にさして戴き升。」という結びは帰ってきて欲しいという気持ちを見せるものではない。むしろその逆であり、それは後半を読めば明らかだろう。

手紙の後半は、夫の健康を気遣い「少しでもお神経痛の方おわるかつたら函根に御養生に御出遊はし升様」勧め、「夜分は別にこわい事も御座いませぬ」と言い、「これだけくだらぬ事を申上ましたら胸の苦しいのが楽になりました。」と結んでいる。

前半は沈んだ淋しい調子で、夫の気持ちが自分のほうに向くよう訴えかけた内容、後半はやや明るく健気な調子で、無事な日常を報告し気分の鎮静を告げた内容に転じ、必要なら湯治にも出かけてと勧めたりもしている。したがって「手紙」全体のメッセージは、私は不調で気持ちも沈みがちだが何とかやっています、そちらでゆっくり滞してもらっても大丈夫ですという風に読める。

無論この手紙自体は真情のこもった感動的なものに違いない。読者は心を動かされて当然である。しかし問題は「彼」がこの手紙を

読んで何を感じるかである。一般の読者と同じなら、この小説は文学的感動の契機に乏しい、異化作用をもたらさない作に止まる。しかし「彼」の反応は読者と違う。

弱りきった「妻」は、その淋しさにも関わらずなせ早く帰って来て欲しいと書かないのか。それは夫が京都に戻ることの意味が分かっているからだ。「彼」の約束を信じたいが、これまでの経験でまたそれが破られる可能性が少なくないことを知っている。「彼」が東京にいる限りその点は安心なのである。物語のこれまでの経緯から考えて、「彼」がその「妻」を気持ちを読めないはずはない。「彼」は「妻」がまだやせ我慢しているなと思つて手紙を読んだことだろう。

「彼」が手紙を見ている時に「電報」が舞い込む。その文面は「オカヘリネガウ」の一言で「手紙」の分量と比較にならぬ短さだが、「妻」にも「彼」にも手紙と等しい重みを持つものに違いない。「妻」にとっては再び裏切られる可能性を知りながら出した電報である。「妻がいよ／＼堪えきれなくなつた」と「彼」が思うのは、その心のはつきり分かつただろう。「彼」にとっては、「女」に会つても良いから帰つてほしいと言つて寄こしたのと同じである。だから「二十分程で支度し、漸く最後の急行に間に合つた」。まさに飛び立つ思いである。翌朝京都に着いた「彼」がまず行くところがどこかは言うまでもないだろう。

\*

さて、相容れない要求を持った夫婦の物語は夫である「彼」の

〈勝利〉に帰した。「彼」の「我」は貫徹された。「妻」の苦しみと悲しみを承知していながら、自身の中に在る「女」への執着にこだわり続ける。そういう「彼」の姿には、たとえそれを「ウルトラ・エゴイスト」（小林秀雄）としての志賀直哉と重ねて見ても共感しにくいものがある。「妻以外の女を愛するといふ事は彼では甚だ稀有な事」（『山科の記憶』）であつても、一般的に見ればつまらぬ私事に過ぎない。「痴情」は「彼」の〈勝利〉を告げて結ばれた形だが、ほんとうの勝利者はむしろ「妻」の方だろう。電報を読んだ後、彼は「病気でも悪いのかしら？」と「母」に聞かれて「私が道楽したんです。」と応える。それは「女」への執着は「恋愛」なのだという「妻」に対する自己主張（そして自己弁護）の拠り所を自ら放棄したことを意味する言葉である。同時にそれはまた思いがけなくも「彼」自身が囚われた心から自由になったことを意味する言葉であり、主題の完成をそこに見ることができるといえる。

「山科の記憶」をプロローグとする「痴情」は以上のように読める。志賀の私小説としての価値とは別に、普遍的な主題を追求した作品として評価することは可能だと考えられる。しかし「痴情」の次に書かれた「晩秋」は、先述した登場人物の命名（「彼」以外には皆固有名詞が付いた人物である）を含めて、そのモチーフは私小説ないしは心境小説へのはっきりした傾斜を示している。そこには「瑣事」を取り込みながら（山科もの全体）が私小説に回収されて行く事態が進行していたのではないか。

「山科の記憶」「痴情」「晩秋」と数ヶ月ずつの期間をはさんで進

められたその仕事は、「女」への執着にあきらかな余裕が生じた時を描いた「瑣事」を組み込んで、危機の発端から終息にいたる心境小説の予定調和的世界を当初から目指したものと見るか。それとも必ずしもそうではなかったが、結果的にそうなったと見るか。これはこの時期の志賀の文学を考える場合まことに興味深い問題であると思われる。

注1 論文題名にも用いた（山科もの）とは、言うまでもないが大正の末頃

京都の山科に住んでいた志賀直哉が愛人を作り、それが妻に知れた出来事の内容を書いた短編四作を仮に総称したもので、「瑣事」（大正四年九月『改造』）、「山科の記憶」（大正五年一月『改造』）、「痴情」（大正五年四月『改造』）、「晩秋」（大正五年九月『文芸春秋』）の順で発表された。内容の前後関係は「山科の記憶」―「痴情」―「瑣事」―「晩秋」の順となる。

2 高田瑞穂「山科の記憶」一系の作品について」（『国語と国文学』昭和四六年六月）

3 管見に入った唯一の例外として小林幸夫「山科の記憶」論（意識）の病」（『作新学院女子短期大学紀要』昭和六年一月）がある。

4 岡松昭「山科もの」について（二冊の講座 志賀直哉 昭和五七年一月）有精堂

5 中村智「志賀直哉『山科もの』論」（『山口国文 第十八号』一九九五年三月）は比較的最近のもので、『志賀文学の文脈、すなわち作品間の文脈ならびに作家的文脈を『山科もの』読解の補助線とする』という方針に徹した試みになっている。

6 「郁子」の名は、近いところでは「曇り日」（『新潮』昭和二年一月）の妻に用いられている。

7 『改造』昭和三年七月。

8 参考までに「瑣事」の結びを引いておく。「此処から曲がつて行かう

- か……」彼は現金に擦違ふと直ぐ云つた。そして一の鳥居から曲り、四季亭の下から、築地の塀について行く時には我ながら可笑しい程快活な気分になつて、此間其処の鷺池で活動のロケーションがあり、強い若侍に投げ込まれた悪者の一人が本統に溺れかけた事を面白可笑しく話しながら歩いてゐた。」
- 9 夫婦間の信頼がプロットに大きく関わる点で、「山科の記憶」のモチーフはかなり前の「好人物の夫婦」(『新潮』大正六年八月)の変奏を思わせるところがある。
- 10 拙稿「志賀直哉の文体―覚え書き風―」(『国語と国文学』平成二五年一月)参照。
- 11 『志賀直哉』(昭和三三年九月 五月書房)
- 12 『志賀直哉』(一九九四年七月 岩波書店)、引用は新潮文庫(平成九年八月)によつた。
- 13 志賀の私小説と言つても(山科もの)は事実との照合が困難な点に大きな問題がある。阿川弘之は「故意か偶然の結果かは分らないがこの時期の志賀日記は存在しない。大正十三年一月五日、京都生まれの美術史家田中喜作に誘われ、『梅垣といふ宿』で夜を徹して遊んだ記述を最後に途切れてしまい、十三年十四年の二年間完全なブランクで、日記書きが再開されるのは、大正十五年の元旦になる。」と書いているが、現在に至つてもこの間の日記の存在は知られていない。
- 出来事の経緯を時系列化した考察がいくつかあるが「お清」と呼ばれる女性との関係やそれが露見したことでは生じたさくさくさちようどこの日記不在の期間と重なっている。さらに書簡などを調べても関連の記述はほとんど見当たらない。阿川によれば「お清」と呼ばれる女性に関しても作中に書かれた以上のことはまるで不明なのだという。どうも信じられないような話で、同じく私小説として読まれてきた「或る朝」や「母の死と新しい母」「和解」などを想起すればその異例さを思わざるを得ないのである。つまるところ(山科もの)は私小説と見なされながら事実の裏づけがとれないという不可思議な作品である。

※テキストの引用は『志賀直哉全集』(一九七三年 岩波書店)によつた。  
なお本稿は昨年度の学外研修による成果の一端である。

(はやし・ひろちか 本学教授)